シクラメン

大正７年にはじめて東野村(現恵那市)に導入されたのが恵那でのシクラメン栽培のはじまりと言われています。シクラメンの学名は *Cyclamen persicum* 英名は Cyclamen で和名カガリビバナといいます。有名な植物学者牧野富太郎博士が和名の名づけ親ですが、呼び名はシクラメンが一般化しています。地中海地方が原産の多年草でイタリアを中心に黒海沿岸のコーカサス地方まで自生しています。

恵那のシクラメン栽培の先駆者、伊藤孝重氏は家業の蚕糸を継ぐため上田蚕糸専門学校(信州大繊維学部)で学んでいたとき修学旅行先の東京三越百貨店でシクラメンにであいました。学校を卒業しても蚕糸業を継ぐ気になれず、大正５年 18 才の時には、切り花(キンセンカ等)をつくり恵那市周辺に売り歩いたといいます。

当時大井ダムの建設のために来日していたアメリカ人技師の奥さん(ドイツ人)からシクラメンの栽培を進められ、得意の語学を活かしドイツから種子を輸入して試行錯誤の中で栽培を続けました。昭和になり同じ東野で切り花を栽培していた千藤恩三氏は伊藤氏より種を分けてもらいシクラメンの栽培をはじめました。

阿木地区では鷹見正夫氏が最初にシクラメンの栽培をはじめました。農業を志していた彼は果樹園芸を学ぼうと１５才のとき長野県に勉強にいきましたが、花の魅力に取りつかれアスターの切り花栽培に取り組みます。東野で栽培されていたシクラメンに目をつけ、種を譲り受けて栽培を始めました。このときまだ１８才でした。ここから阿木地区にひろがり始めました。

第二次世界大戦中は主食一辺倒になり花き生産は低迷しますが、戦後復員した鷹見氏は再度シクラメン栽培を開始し軌道にのせていきます。昭和２８年頃になると温室ガラスも登場し阿木地区では鷹見正夫氏を中心に鷹見泉氏、田島敏夫氏、丸山博文氏、鷹見弥兵衛氏が本格的な栽培に取り組み阿木の種苗産地の基礎が作られました。

この時期東野で 2 戸、阿木で 5 戸のシクラメン栽培家が活動し、岐阜県シクラメン生産組合を結成し、互いに技術の向上に励みました。その後により結束を高めようと「恵那花き研究会」をつくり今も活動を続けています。

※「恵那シクラメン－80 年のあゆみ－」　恵那花き研究会(平成 5 年 11 月)より

◎良いシクラメンの選び方

葉がしっかりしたもの:葉の数と花の数とは比例していることから葉の数が多く葉色が濃く大きさのそろっていること。

蕾の多いもの:シクラメンは長期間咲き続けることから生育ステージの異なる蕾の多くついているものを選ぶ

病害虫におかされていないもの:株元に灰色のカビがついているもの、花弁に斑点の様なシミのついているものはさける。花弁の奇形や白くすれた状態のものはホコリダニやアザミウマにおかされており注意が必要。

「そば・シクラメン祭り」より